

国際外科医学博物館と ドイツ博物館

Radiological Society of North America (RSNA) 第100回大会が、2014年11月30日～12月5日までアメリカのシカゴで開催された。RSNAは、毎年McCORMICK PLACE, CHICAGOで開催される世界最大の放射線医学関連の国際学会である。

今回は、レントゲン (Wilhelm Conrad Röntgen : 1845～1923年) がX線を発見してから120年目に当たり、レントゲンの実験室も再現され、初期の装置も展示されていた。Technical Exhibitsを見ると、科学的発見の波及効果が120年経っても衰えないばかりか、拡がりとしを強めているのを実感する。肉眼で見えない作用を光源にすることで、それまで見えなかった姿が描出提示され、科学と技術が密接不可分に結び付いて進歩しているのを実感した。

リンカーンパークの南側、1954年にオープンした国際外科医学博物館 (International Museum of Surgical Science) を訪れた。小規模な博物館だが、外科手術を中心に、過去4,000年に及ぶ世界の医療技術の進歩の歴史を、医療器具や絵画の豊富なコレクションで展示している。

日本の殿堂 (Japan Hall of Fame) では、江戸時代の医学者、華岡青洲が全身麻酔を用い、世界初の乳癌手術を行ったことが紹介されている。

またX線の初期の装置から最近のPET (Positron Emission Tomography) 画像まで、放射線関係の歴史的展示は興味深い。偉人のホールでは、キュリー夫人 (Marie Curie : 1867～1934年) とともにレントゲンが称えられている (写真1)。

ミュンヘンにあるドイツ博物館 (Deutsches Museum) は、1925年に開館された世界でも有数の科学技術博物館で、じっくり見て回れば1日でも足りない。物理学展示室 (1st floor : 2階) の一角に、レントゲンのビュルツブルグ大学の実験室の写真と、実験に使用したルームコルフコイル (実物)、それにX線の発見時や、それを伝える報道などが



写真1 レントゲンの像 (国際外科医学博物館)



写真2 レントゲン関係展示 (ドイツ博物館)

展示されている (写真2)。

ここには、国際外科医学博物館のような歴史的展示はなく、X線の基礎的事項をよく説明しているので必見の価値がある。1時間もあればレントゲン関係の展示を見ることができるので、後は、船舶、飛行機、機関車、自動車の歴史的展示を見て歩くと1日が終わる。

■ 参考資料 ■

- 1) 諸澄邦彦, ビュルツブルク大学, *Isotope News*, No.729, 41 (2015)
- 2) 諸澄邦彦, X線発見から120年レントゲンゆかりのドイツ紀行, 日本診療放射線技師会誌 JART, 62(747), 58-64 (2015)

〔日本診療放射線技師会 諸澄邦彦〕